

米国に居を構え、米国のデジタル放送とインターネットTVの動向をウォッチし続けているテッド若山氏。今月のテーマは「地上波ネットワークの衰退」である。

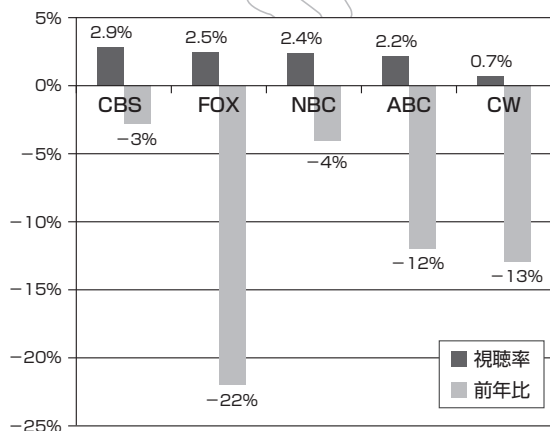
テッド若山氏は、米国の調査会社ストラテジック社の調査担当副社長を経て、1987年にNSI Research社を設立。情報・通信・放送技術分野のマーケット調査とコンサルティング・サービスを提供している。さらに、マンスリーレポート「The Compass」を出版。購読希望者はcompass@nsirinc.comまで。

### テレビ離れが著しい18～24歳

アメリカのテレビ放送シーズンは毎年9月に始まり、ほとんどの番組は夏休みの前に終わる。夏の間は再放送が主体なので、6月が実質シーズンの終りであり、翌シーズンの広告スポンサーへの売り込み時期でもある。2012/2013年期はアメリカの地上波ネットワークにとって過去最悪の年であり、暗い6月であった。

アメリカのテレビ視聴世帯は2011/2012年期から減少を始めた。全世帯におけるTV視聴世帯率は、2010/2011年期では98.9%であったのが、2012/2013年期には96%に落ちている。テレビを視聴していない世帯は、2010/2011年期では130万世帯であったのが、2012/2013年期では480万世帯に増えている。テレビ離れが特に激

■18～49歳の平均視聴率（12年9月～13年5月）



# 地上波ネットワークの衰退

しいのが18～24歳の層で、プライムタイムにおける視聴時間は前年比で7%落ちている。

このテレビ離れは、特に地上波ネットワークに大きな影響を与えた。5つの英語地上波ネットワークは軒並み視聴率を落とした。2012年9月から2013年5月における18～49歳の平均視聴率では、2.9%でトップであったCBSでも、前年同期比マイナス3%であった。視聴率を最も落としたのは、昨年1位であったFoxで、22%も減り、平均視聴率は2.5%となった。2月の平均視聴率では、スペイン語ネットワークのUnivisionがCBS、Fox、ABCに続き4位にランクインした。英語以外のネットワークがトップ4位に入ったのは史上初である。

昨年の9月に始まった地上波の新番組のほとんどは失敗であった。合計で10本の新番組がスタートしたが、トップ20に入った番組はたったの1つで、2013/2014年期への続投が決まったのは2つだけであった。2012/2013年期における18～49歳の層で最も視聴率が高かったドラマは、地上波ネットワークではなく、AMCの『The Walking Dead』で5.55%の視聴率があった。2位はCBSの『The Big Bang Theory』で4.75%であった。今年のエミー賞では、地上波ネットワークのドラマが候補に1つも挙がらなかったことでも、地上波ネットワークの不振が見られる。

### 広告単価上がるも、プラス成長せず

2012/2013年期のトップ番組は、2年連続でNBC『Sunday Night Football』であった。スポーツ番組の視聴率は依然と高く、4大ネットワークはスポーツで視聴率を稼いでいる。しかし、スポーツでは、多チャンネルネットワークのESPN等との競争がある。また、多チャンネルネットワークでさまざまなスポーツの試合中継が行われていることで、これまではドル箱であったアメリカンフットボールの視聴率は減少を見せている。

この不振は当然、地上波ネットワークの広告の売り込みに影響を与えている。地上波ネットワークは、2013/2014年期の視聴者あたりの広告単価が前年比6～7%増えていると語っている。しかし、地上波ネットワークの視聴者数は前年比で10%近く減っており、単価が7%増えてもプラス成長にはならない。